

## 日仏交流とおもてなし

「Très bien（トレビアン）（素晴らしい）」と来高した多くのフランス人からお褒めの言葉をいただきました。10月末に本市で開催された「第4回日仏自治体交流会議」についてです。日仏間で姉妹都市縁組みをしている自治体の代表者が一堂に会する会議で、フランス側17、日本側28の計45自治体という過去最多の参加を得ることができました。期間中は、天候にも恵まれ、栗林公園や屋島、また直島への視察などで、高松市と周辺地域の自然や文化、生活の豊かさや魅力に十分触れていただけたものと思います。会議では、「グローバル時代において、地域経済の活性化を図るために自治体は何をなすべきか」を全体テーマとして、「産業」、「文化」、「都市開発」の3つの分科会で都市の持続可能な発展に向けた方策などについて活発な議論が展開され、合意内容などを集約した「高松宣言」が採択されました。

日本とフランスは、遠く離れ、自然環境や国民性、政治制度や生活習慣なども大きく異なります。しかし、そのメンタリティーにおいて、互いに引きつけられ、親近感を感じる部分も大いにあるように思います。特に芸術と料理（食）の分野においては、価値観を共有していると言っても良いほど、感性が通じ合うところがあります。今回も、直島の現代アートや招宴における地元の旬の食材を使った和食などは、言葉など全く必要無しでフランス人の心がちりちりつかんだようでした。

19世紀フランスの名著「美味礼讃（びみらいさん）」に書かれてある食に関する格言の中の一つに、「だれかを食事に招くということは、その人が自分の家にいる間じゅうその幸福を引き受けるということである」（注）とあります。これなどは、日本の「おもてなし」の心に通じるものではないでしょうか。今回の会議においても、この「おもてなし」の心を大切にしながら運営を執り行ったことが、日本人、フランス人双方に通じて高い評価を得られたのだと思います。

この日仏自治体交流会議の成功は、高松市に大きな自信を与えてくれました。自然、経済、文化がそれぞれに魅力的で高いレベルで融合調和しているという評価もいただき、「世界都市TAKAMATSU」としての第一歩を踏み出せたようにも思えます。

（注） 「美味礼讃」（ブリア・サヴァラン著 岩波文庫）